

日本学研究

2

北京日本学研究中心

1992年

日 本 学 研 究

2

北京日本学研究中心编

科 学 技 术 文 献 出 版 社

1992年

(京)新登字130号

主编
编委

李书成	池田温	
周维宏	譙燕	李庆祥
大谷通顺	山下纪久枝	有末贤
原土洋	今井雅晴	犬饲公之

日 本 学 研 究 2

北京日本学研究中心 编

科学技术文献出版社出版发行

(北京复兴路15号 邮政编码100038)

外文印刷厂印刷

*

787×1092毫米 16开本19印张483千字

1992年10月第1版 1992年10月第1次印刷

印数: 1—1000册

I S B N 7-5023-1855-0/Z · 312

定 价: 20.00元

まえがき

1992年5月1日締め切り分の投稿原稿および依頼原稿、合計27篇を、『日 本 学 研 究 2』としてここに刊行する。

1992年前期の編集委員会において決定された、投稿原稿に対する審査基準および手続きに従い、今回はじめて投稿原稿に対して掲載の可否を判定する審査が行なわれた。ここに掲載されたのは、すべてその厳正なる審査を通過した優秀論文である。他方、依頼原稿は、これまでどおり北京日本学研究センター関係者、および中国国内で顕著な活躍をしている研究者あるいは社会活動家に対して当編集委員会から執筆が依頼されたものである。

1992年の北京日本学研究センターの特筆すべき活動として、5月20～23日に開催された『第4回日本学中日シンポジウム』がある。折しも日中国交正常化20周年にあたり、当センターが挙行了たこの種の会としては空前の規模のものとなり、研究報告も高水準のものが数多く集まった。その特集として、本書には「第4回日本学中日シンポジウム論文選」の表題のもとに、シンポジウム特別講演の一部を転載した。原稿の転載をご快諾くださった講演者の方々に心からお礼を申しあげる。

なお編集上の経験不足もあり、本書には誤りや遺漏などが小なくないと思われる。大方のご意見、ご批判をいただければ幸いである。

北京日本学研究センター
編集委員会

1992年9月30日

目 次

まえがき……………編集委員会 (i)

第4回日本学中日シンポジウム論文選

日本詩歌の特質……………大岡信 (1)

新井白石論……………周一良 (9)

関于“誠”中心的儒学——日中儒学的比較……………王家驊 (20)

日本語言

日語助動詞論考……………劉耀武 (28)

論語言信息內涵意義的翻訳……………劉宗和 (38)

「ずけり・ずけむ・ずけば」の表現について……………徐一平 (47)

中日辞典をめぐる中日対照言語学上の問題……………山田眞一 (58)

「よろし」の消極的評価の用法をめぐる……………朱京偉 (67)

日本文学

俳句漢訳漢詩漢俳……………李 芒 (79)

論古井由吉作品中的女性形象……………馬朝紅 (89)

東方現代化的探索——夏目漱石与老舍比較研究……………王 成 (100)

女流仮名文学の始発とその意義——『蜻蛉日記』と道綱母の場合——
……………野口元大 (113)

「近代日本における『愛』の虚偽」という問題……………野坂幸弘 (123)

漢籍と日本中世紀紀行文学——その一『蒙求』と『海道記』——……………羌国華 (140)

日本社会

「昭和天皇独白録」芻議……………万 峰 (155)

中日關係史新的里程碑——記念中日邦交正常化20週年、兼論中日
……………

關係史分期……………楊正光 (173)

日本人和日本現代化……………李書成 (190)

淺論列寧關於農村工業化的思想——日本農村工業化研究的理論探索
之一……………周維宏 (196)

綱狀社会人際關係——中日社会結構特質初探……………宋国忠 (205)

1954年的經濟調整与戰後日本經濟的“起飛”……………楊棟梁 (215)

現代日本社会と「ポスト・モダン」状況……………有末賢 (229)

日本文化

日本近代中国学形成的歴史考察（二）——“中国歴史”

近代性研究の確立	嚴紹璽 (252)
中日文化与西方文化比較管窺	田 桓 (271)
西周的啓蒙思想与儒学	王家驊 (279)
日本漢詩与中国文化	柏 寒 (290)
瀟湘八景初探	張景翔 (297)
あとがき	編集委員会 (309)
英文目次	(310)
投稿規定	編集委員会 (312)

日本詩歌の特質

東京芸術大学教授 大岡 信

「日本詩歌の特質」という大きな題をかかげたが、限られた時間内でこの主題について多岐にわたる話ができるはずはない。従って私がこれからお話しするのは、この主題に関連して今私が深い関心を持っている二、三の点についてであることをあらかじめご承知置き願いたい。

最初に私自身の体験から得た観察についてお話ししたい。

私は一九七九年一月から毎朝「朝日新聞」第一面に「折々のうた」という小さな連載コラムを書いてきた。このコラムは日本の古典から現代にいたる詩歌作品、すなわち短歌・俳句・川柳・歌謡・自由詩・漢詩の一節、あるいは日本語に訳された外国の詩の一節その他を毎回一篇ずつ引用し、それらに短い批評と鑑賞を加えるものである。一年に十日間ほどある新聞休刊日を除けば、一日の休みもなしに毎朝掲載されるものなので、時々はかなり長期の休暇を取る必要がある。今年の四月末日で実質的にはこの連載が満十年に達した。そこで五月一日から来年四月三十日まで満一年間、このコラムを休むことにし、今はその重荷から解放されて三週間目になったところである。

「朝日新聞」は七百万部以上発行されている上に、私のコラムは第一面に掲載されているから、これをある程度定期的に読んでいる人の数は、少なく見積もってもおそらく数十万人に達するだろう。毎朝、一篇ずつの短い日本の詩と、それについての解説文を読んでいる人が数十万人ほどはいるだろうという事実は、全世界のジャーナリズムを見渡しても他に類例がない現象である。このため私は、ヨーロッパの友人の詩人などから、しばしば羨ましいといわれる。確かに、現代の詩人が、毎朝数十万の読者に接し得るということは、詩人に与えられ得るごく稀な幸運であることは言うまでもない。そして実際、私は日本人の多くが、このような形で自国の詩歌伝統に触れることにきわめて大きな喜びを感じていることを、さまざまな機会に思い知らされている。

この仕事のため、私は日本の詩歌の特質についてしばしば考える必要があった。というのも、この問題をめぐって日本各地で講演するよう依頼されることが多いためである。そこで私が達した一つの結論がある。これが実はあまりに単純で当たり前、かつ周知のことなので、あえて論じるのも恥ずかしいようなものなのだが、それでも私はこれを非常に本質的な、議論の出発点となりうるものと考えている。

では、古代以来変わらなかった日本詩歌の特質とは、いったい何なのだろうか。そ

れはその「短さ」にある。短歌一首を口ずさむのに私たちは十秒も必要としない。俳句にいたっては五秒で足りる。このあまりにも当たり前の事実は、私には非常に重要な日本詩歌の本質に触れるものだと思う。

私自身は、短歌や俳句のような定型短詩ではなく、長さも自由、リズムも自由であるいわゆる現代詩を半世紀近いあいだ書いてきた人間である。現代詩は、短歌・俳句のような定型短詩の強力な伝統に反抗して生じた、百年あまり前の新体詩（新しいスタイルの詩）から出発したものである。現在では、もちろんこの現代詩の作者・読者の数も大幅に増えている。

しかし現代詩の自由詩形式は、欧米の詩からの影響を直接に受けて成立したものであった。日本の詩の本質的な形式的特質を考えようとするなら、何よりもまず、一千年以上歴史を持つ短歌形式、またそこから派生した俳句形式について考えなければならない。

というのも、五七五七七の合計三十一音節で作られる短歌形式も、五七五のわずか十七音節で完結する俳句形式も、今新しい復興期・繁栄期を迎えているからである。これらのいわゆる伝統詩は、単に歴史的に起源が古いばかりでなく、コンピューターとハイテクノロジーの驚異的発達の上に成立した一九七〇年以降の日本のいわゆる「情報化社会」において、かつてないほどの大衆的人気を得ている。百万人とも二百万人とも推測されるほどの多数の愛好者が、現代日本においてこれらの伝統詩を実作し、また鑑賞しているのである。

もちろんこれらの詩型の専門作家もいる。その数は、無名の愛好家たちの数に較べれば遥かに少ないが、それでも数千人はいるだろう。彼らは自ら専門的に短歌や俳句を作るだけでなく、数百人、数千人の弟子たちをかかえて彼らのために実作指導をおこない、自分が主宰する雑誌を持ち、特に著名な人々の場合は、新聞・全国的規模の商業雑誌・テレビジョン・ラジオなどさまざまな情報媒体で指導にあたり、かつまた日本各地にたくさんある教養センターでも実作指導にあたっている。彼らはそのようにして生計をたてている職業歌人・職業俳人である。

しかし何といっても重要な存在は、全国に膨大な人数が存在しているアマチュアたちにほかならない。日本はたぶん全世界で唯一のアマチュア詩人の氾濫している国であろう。彼らは日常生活のあらゆる些細な出来事から、恋愛、労働、家族、病気、死など諸事万般にわたる題材を取り上げ、短歌や俳句にそれを表現する。

詩というものがこれほど日常生活に密着して書かれている国は、これまた世界的に稀だろう。短歌や俳句は、もちろん形而上学的主題をも扱うが、そのとりわけ重要な性格は、日常生活のあらゆる些細な出来事を、自由自在に取りあげることができるということにある。アマチュア歌人や俳人が膨大な数に達するというのも、まさにこのような性格の詩だからである。

そして時には、こういうアマチュアたちの中から、スーパースター的な存在が一挙に躍り出ることさえある。今から五年前の一九八七年、短歌を作りはじめてまだ日も浅い若い女性高校教師俵万智が刊行した短歌集『サラダ記念日』が、一年間ほどのあいだに三百万部近い部数売を一大ベストセラーとなって、その年の読書界の話題を

独占した。

倭万智の出現は、一千年以上昔から無数の人々によって用いられてきた陳腐な形式であるはずの短歌形式が、現代詩というまでもなく、小説や戯曲やエッセーなど他のどんな文学形式にも優って、情報化時代とよばれる現代に生きる青年男女や一般市民の感情生活を生き生きと表現しうる文学形式であったことを、衝撃的に実証した。彼女は、短歌形式によって自己表現をなしとげると同時に、短歌形式という実に古い歴史をもつ皮袋をも、新鮮な酒で満たすことによって、この形式そのものの魅力を現代に甦らせたのである。

短歌よりさらに短い俳句形式の場合は、すでに一九七〇年代以来ブームを謳歌している。俳句作者の数も、過去のどんな時代よりも多いだろう。短歌集や俳句集の刊行もきわめてさかんである。私のもとに寄贈されるその種の本は、多いときには一日に七、八冊にも及ぶことがある。一カ月に少なくとも百冊から百五十冊ぐらいの数の短歌集や俳句集が送られてくる勘定なので、私の小さな仕事部屋の床が、本の重みで多少とも沈んでくるのは避けられない。「塵も積もれば山となる」という諺があるが、それをもじって言えば、「短歌も積もれば家を傷める」。

一方ではコンピューターとハイテクノロジーの先進国、他方では古代以来の素朴単純な定型短詩が無数の民衆に愛用されつづけている伝統詩の王国。これが現代日本の二つの顔である。この場合注目すべきことは、一見矛盾するように思われるこれら二つの側面が、日本人一人々々の生活の中では、何の矛盾もなく共存し、融け合っているという点である。

一人の有名な科学者の例をあげよう。一九四九年に日本人では初めてノーベル賞を受けた量子論の世界的先駆者湯川秀樹博士は、短歌の愛好者としても知られていた。短歌作品集をも一冊刊行しており、しかもその歌はなかなかすぐれていた。彼はまた、日ごろ老子や莊子をはじめとする中国の古代思想家たちを愛読していた。これら東洋の文学的・思想的素養が、彼の独創的な理論物理学上の発見と、内的に深く結びついていたことは、彼自身がしばしば書いているとおりである。

自然科学の諸分野における有名な専門学者が、短歌や俳句においても一流の作者であった例は少なくない。一般市民の場合についていえば、このような事例はますます多く見出される。古代以来、形式的にはまったく変わっていない定型短詩が、コンピューターの支配する情報化社会の中でますます人々に愛好され、繁栄しているという現象は、こういうわけで現代日本文明の一つの特徴的な事実といえることができるのである。

これを社会心理学的観点から解釈するなら、次のように説明することもできるだろう。すなわち――

コンピューターがますます強力に社会機構の中に入りこみ、支配力をふるうようになるということは、現実には、巨大コンピューターの本質をなす中央集権的・統制的性格が市民一人々々の暮らしをますます強く支配しはじめることを意味している。コンピューターは人々に能率的で快適な生活を営むことを可能にしてくれる反面、市民一人々々の生活から、個性的な多様性、あるいは個性的逸脱とでもいうべき要素をし

だいに奪い取ってゆく。

比喩的に言えば、互いに何百キロも離れた地点に住む二人の人物が、同じ日の夕食に、同じ方法で栽培された野菜を同じ方法で調理し、その均一な味のする惣菜を、それぞれの食卓で食べている社会、これがコンピューター万能時代の一般的食事風景のイメージとなる。もちろんこれは誇張したイメージだが、本質的には誤っていないだろう。

これは、一面から見れば「平等」という理想の実現された姿である。しかし他面から見れば、各地域の個別的な特徴がしだいに失われた単調で平板な社会生活の到来の姿ということでもある。

日本ではテレビジョンの普及と歩調を合わせるようにして、従来各地方で語られていた方言が急速に消滅してゆく傾向にある。それが逆に、方言の魅力や文化的重要性についての議論を呼びさます。現在「日本語論ブーム」とでも言っている一つの流行が日本で生じているが、これも、そういう状況の中から生まれてきた。

地域独自の歴史によって育まれてきた独特の言語、すなわち方言に対する関心の高まりは、コンピューター社会が必然的に備えている統制と画一化の風潮に対する危機感と抵抗の一つの表れと見ていいだろう。

現代日本社会における短詩型文学の隆盛も、同じ社会的基盤から生まれてきたものだとは考えている。いわば、短歌も俳句も、それを熱心に作っている人々にとっては、画一化する社会に対する個人の抵抗の証しなのである。

これはまた、現代日本で伝統文化の再評価がいちじるしく勢いを増してきたこととも、深い内的関連があるだろう。たとえば演劇について見ても、伝統破壊的な前衛演劇が多くの学生たちの心をとらえた一九六〇年代の熱気が過ぎ去ったあと、ふと気づいてみれば、能、狂言、歌舞伎といった数百年の伝統と様式美をもつ古典演劇の劇場が、どこもかしこも満員の観客を集めているという時代がやって来ていた。茶道やいけばなを学ぶ人々、書道にうちこむ人々の数もますます増加している。その中には、学生やそれに準ずる年齢の若者の数も多いのである。

これらは総じて、社会全体の保守化の風潮の高まりを示しているように見える。実際その側面があることは否定できない。しかしそこには、単に前衛的なものへの反動としての保守化といった側面だけではなく、むしろもっと根本的に、現代社会そのものがもたらす危機感のあらわれもあるように私には思われる。つまり、情報化社会の急速な発展につれて人々が感じはじめている不安、すなわち社会全体が多様な価値観の共存によってばらばらになってしまったという不安が、伝統的堅固な価値観の担い手としての短詩型文学や古典演劇、茶道その他の様式的な生活芸術へ人々の目を向けさせているのではないかと私は思うのである。これらの伝統芸術には、ある種の堅固な様式があり、努力を重ねてゆくにつれ着実に上達できる技術の明確な基準があり、さらに大切なことに、そこには自分と同じ目標に向かって歩んでいる多くの仲間がいるという事実がある。この仲間は、自分にとってはライバルでもあるが、そのこと自体、自分の努力をうながす大きな生き甲斐となる。自分の孤独な努力が、一定の価値基準に照らして評価され、賞讃もされうるということは、価値観の多様な分裂と共

存の中にあてどなく漂っているように見える情報洪水の時代においては、個人に対して一種の救いとして作用するのである。

情報洪水という言葉は、中国ではあまり耳慣れない言葉であるかもしれないが、現代日本についてはこれほどびったり来る表現もないであろうと思われるほど、情報源も情報量も、また情報の種類も多種多様であり、人々はその洪水の中で日常生活を営んでいる。新聞や雑誌やラジオのような、比較的古典的な情報機関だけでも、すでに龐大な数にのぼるが、新しい情報機関として一九五〇年代から登場したテレビジョンだけでも、人工衛星を利用した衛星放送まで含めて、十種類を超えるチャンネルが、早朝から深夜あるいは明け方近くまで、政治・経済・社会・文化・スポーツ・娯楽・趣味・料理・旅行・討論・書評・映画その他、人々の関心や好奇心のおもむくままに、あらゆる分野にわたっての番組を切れ目なしに放送している。民間放送の場合には、それぞれの番組のスポンサーの宣伝広告が頻繁に流されるが、これらすべてが、多様な情報として視聴者に与えられている。そこには、きわめて優秀な技術によって制作された高度に知的な番組から、電波の犯罪的な浪費にすぎない愚劣な番組まで、すべてが資本の論理に従って平等に市民の家庭へ送りこまれている。

このような情報洪水現象を一言で評すれば、「過剰なおしゃべり」であり、「情報一つ一つの価値の下落」ということである。「もっと豊かな沈黙を」と願う人々が出てくるのは当然であろう。

この願いの一つの具体化が、定型短詩への関心の高まりという近年の現象なのだと解釈しても、さほど間違いではないと私は考えている。短歌や俳句が静かなブームを起こしてきた理由を社会心理学の観点から見ると、その背景には明らかに、情報化社会が持たざるを得ない病理的現象としての「繁栄のむなしさ」に対する警戒心、反感があるだろうと思われる。

ここで、最初に私がふれた日本の詩歌の顕著な特質である「短さ」が、あらためて大きな意味をもってくることになる。

短歌にせよ俳句にせよ、それらの特徴たる「短さ」は、必然的に最も重要な技術として、「省略」と「暗示」を要求する。

近代日本の最も有名な俳句作者だった高浜虚子に次のような一句がある。

彼一語我一語秋深みかも

ここでの「彼」と「我」は、今どんな場所にいるのか、作者は何ひとつ語っていない。二人の年齢もわからない。室内にいるのか、それとも戸外にいるのかわからない。二人が立っているのか坐っているのかもわからない。向かいあっているのか、離れた位置に別々の方角を向いているのかもわからない。どんな関係の男同士なのかもわからない。わからないことばかりである。そのわからないことばかりの舞台背景の前で、二人がすることと言えば「彼」がぼつりと一語を発し、それに答えて「我」もぼつりと一語を発しているだけである。しかも二人の一語ずつの言葉が、何という言葉だったのかも書かれていない。しかし、「彼」が一語を発し、「我」が一語を返したとき、晩秋の空気はさらに深まる気配を示し、あたりの空間は一層深まりを示したのである。二人の男は、深まる秋の天と地の間の広々とした空間の中で、何も言う必

要を感じず、ただ二人で存在しているのみである。一人が一語を発し、他の一人も一語を返しただけだが、そこに悠々たる時間が流れているのが感じられる。他に何ひとつ言う必要もないほど、この二人は互いに心を許し合った友人同士なのである。二人の沈黙こそ、二人の親しさを最もよく証している。

この俳句は、日本語における省略語法の粋をきわめたような作品である。「暗示」という詩的方法を突きつめてゆくと、ついにはこのような句にまで行きつくということを示す一例と言える。「省略」と「暗示」。これは日本の定型短詩の生命力の鍵ともいべき技法だろう。虚子のこの句は、作品の表面にあらわれた言葉だけをとって見れば何ひとつ明瞭な事実を示していない。にもかかわらず、私が今解釈したように、この句が言わんとするところは、はっきりこちらに感じとれるのである。

何ひとつ言葉を交わすこともない二人の人物を描いて、そこに一つの理想的な友情のあり方を示すという詩的野心が、この句ではみごとに成功していると私は考える。そして、この句を読む読者も、それをしっかり感じとることによって、言葉による説明を越えた心の了解というものがあることを知り、深い満足を感じとるのである。合理的説明など句の中に何ひとつなくとも、ごく自然にわかる世界がここにはある。沈黙の中で成り立つ相互理解というものが、句の中の二人の男同士の間にも、またこの句と読者の間にもあることがわかるとき、俳句という、読みあげれば五秒もかからないほどの短い詩型の、不思議な魅力に読者はうたれざるを得ない。

他者と自分とが、いかに微妙な暗示だけですべてを感じ合うことができるか、というところに、俳句の面白さの秘密がある。ごく限られた言葉の暗示力によって、未知の読者との間に深い了解が成り立ちうるという事実は、俳句を作ろうと思う人にとっての大きな自信の源泉にもなるし、何よりもまず、深い喜びをもたらしてくれる。

情報洪水の中で感じる「饒舌のむなしさ」とは正反対の、「沈黙を醸し出す小さな、しかし大きな、言葉の容れもの」としての俳句が、一九八〇年代、九〇年代の現代日本で、多くの人々の心のよりどころになってきた理由は、およそ以上のようなところにあるだろう。

もちろんこれは理想的な事例について言えることであって、現実にはごく限られた人数の俳句作者だけが、このような俳句作品を作ること成功しているだけである。それは言うまでもなく、この詩型が極端に短いからである。極端に短い詩型だから、省略や暗示が必要である。しかしまた、極端に短い詩型だから、暗示や省略は極度にデリケートな技術を必要とする。俳句作者で一流の域に達するのは、よほどすぐれた素質の人でも、六十歳前後になってからである。

俳句の短さに関連して、もう一つ重要な点を付け加えておきたい。それは、「暗示」を、重要な技法とする以上、俳句作品はそれそのものにおいて叙述が完結していることはない、ということである。

たとえば今例としてあげた高浜虚子の句を考えてみればよいが、この句は、何ひとつ明確な事象を描写してはいなかった。その点だけを取りあげていえば、これは不完全な叙述で成り立っている詩である。普通の意味では完結していない小さな断片的でさえある詩である。

これは一見俳句形式というものの欠陥であるように思われるかもしれないが、日本の詩法はむしろそこに積極的な価値を見出した。つまり、このような詩の形式は、他者の多様な解釈に向けて開かれているのであり、潜在的には他者に対してこの句の世界への参加を呼びかけてさえいるのだ、というふうに考えられたのである。

そこから、日本の全詩歌史を通じて最も重要な一つの考え方が生まれた。つまり、詩はただ一人で作るものではなく、他の人々との間で「問い」と「答え」をくり返しつつ共同で詩作品を作ってゆくところにこそ、詩がもたらす深い喜びも価値もある、という考え方である。

これを別の言葉で言い直せば、日本の詩は、古代以来ずっと、人と人との間で交わされる最高度に深い思いやりや愛情にみちた「言葉の贈り物」だった。贈り物である以上、それは相手からのお返しの贈り物を予想する。そのようにして、日本詩歌史の中心線を形づくる共同制作の詩の伝統、すなわち「歌合」「連歌」「連句」の伝統が成立した。

連歌や連句は、数人ないし十数人の作者たちが、同じ部屋に集まって、次々に詩句を連ねてゆく、一定の長さの連鎖状の詩を共同で作るものである。元来は中国の詩法の影響で始まったものに違いないが、日本で独特の発展をとげた。それは七、八世紀ごろの素朴な短い問答体の詩作品に始まり、十五世紀末の宗祇その他の作者達の優雅な作品、十七世紀末の芭蕉や十八世紀半ばの蕉村らの、複雑で精巧、ダイナミックな動きにみちたすばらしい作品群にいたるまで、長い、変化に富んだ歴史を持っており、現在もなお多くの作者たちによって作られている。

このような共同制作による詩作品の試みは、元来が他者に向かって開かれているという性格をもつ短詩型が日本の詩の基本形式だったから可能になったものだと考えてよい。その意味でも、日本の詩の本質が、「短さ」にあったということは大きな意味をもっていた。一篇一篇の短い詩句を次々に連ねてゆく時生じる思いがけないほどダイナミックな展開は、詩人たち自身にとっても、実に喜ばしい「他者の発見」を約束する。久しい以前からの友人だった相手が、このような共同制作をすることを通じて、まだ多くの未知の部分に秘蔵している尊敬すべき詩人であることを新たに知った時の喜びは、単に彼の書いた詩を印刷物の上で読む場合とはまったく違った性質のものであり、友情は格段に深まるのである。

私自身は、この日本の伝統的共同制作詩の方法をさらに別の方向に転じた試みを、すでに十年以上前から、アメリカやヨーロッパの何か所かの都市で、欧米の詩人たちと実行している。これは詩人としての私の生涯において、今ではきわめて大きな意味をもつものにまでなった。時には英語で、何人かの英語圏の詩人たちと数日間同じテーブルを囲んで作ったこともあるが、多くの場合は優秀な翻訳者たちにも参加してもらって共同制作をしてきた。この詩的実践は、私に実に多くのことを教えてくれるものだった。

互いに未知の外国人同士にすぎなかった数人の詩人が、同じ建物、同じ庭のテーブルを囲んで、一日中、あるいは数日間、短い詩を連ねながら共同で詩の連鎖を作ってゆく。同じ目標のもとに集まった者同士の親しみは、創作行為を共にするという稀有

な機会を得て、急速に深まる。一つの笑い声、一つの沈黙が意味するものを敏感に感じとりながら作業が進められてゆく。この作業は、参加者各人の内側から湧きあがってくる詩の、いわば誕生の瞬間が、数人の仲間の前でいやおうなしに公開されるという実にスリリングな側面を含んでいるので、最初は各人それぞれ、当惑したり、恥ずかしい思いをしたり、自らの自我が屈辱的な立場に立たされていると感じたりする。しかし、そうやってしだいに積み重ねられてゆく作品群を見ているうちに、参加者全員が言い様のない刺激と興奮を感じ、共同制作の面白さにのめりこんでゆくのが常である。それは生産的刺激と解放感を与えてくれることによって、詩というものへの信頼感をも強化する。

私はこのような詩的方法が、日本の伝統詩の歴史の中核をなしていたことに対し、遥かな後輩として感謝している。なぜなら、過去に存在したものは、もしそれが真に伝統の名に値するものであるならば、必ずや新しい装いのもとに甦り、今日のもの、明日のものとして、現在生きている私たちのために役立つはずのものと私は思っているからである。（了）

新井白石论

北京大学教授 周一良

江户时代（1603-1867）是日本历史上多采多姿的时代。新井白石（1657-1725）又是江户时代许多著名的、受人重视的人物中最为多采多姿的一个。本文拟就新井白石作为历史人物的特点及其所以突出的原因，试作探索与解释。

• • •

新井名君美，^①号白石。^②出身武士家庭，师事木下顺庵（1621-1698）。1693年在甲斐国（山梨县）的大名德川纲丰的藩内担任儒者之职。^③1709年纲丰继任为第六代将军，改名家宣。白石升为幕臣，在继续为将军讲书之外，参与幕府政治，多所建白。家宣对他也非常信任，1711年赐衔从五位下筑后守，^④次年给俸一千石。1712年家宣逝世，幼子家继继任将军，白石仍参预政事。1716年家继夭亡，第八代将军吉宗继位，斥退旧幕臣，白石亦在其中。退隐后从事著述，1725年年六十九岁逝世。

江户时代经济发达，文化繁荣。但在德川幕府统治之下，存在各种关系亦即各方面矛盾，其错综复杂也远胜前代。始终贯串这个时代的，有幕府与广大农民之间的矛盾，有武士与农民、商人之间和后二者彼此之间的矛盾。以幕府而言，对内有武家与京都的天皇朝廷即公家之间的矛盾，对外有锁国政策与外国势力的矛盾。幕府内部还有因循腐朽的官吏势力与开明幕臣之间的矛盾。白石为人的特点，是身处这些矛盾之间从不躲避，反而大胆介入其中，按照自己的理想行事。其结果往往出人意料，显示出白石的特立独行，给人以铮铮硬骨敢作敢当的印象。也就因此，被当权的老中们目为“鬼”一日文意即怪物。

在讨论处于各种社会矛盾之中的白石以前，先看看在他的出身与教养两方面所体现的武家与文治的矛盾及其调和。

白石出身于武士家庭，祖父名勘解由，是失去主君的浪人。父亲正济是上总国（千叶县）久留里城主^⑤土屋利直的家臣。他们都是典型的日本武士。白石自传上卷里有关于他父亲和祖父的叙述。白石记载父亲正济描述祖父，说他大眼多须，相貌可怕。平常吃饭时，总是从一个用金银粉彩绘有杜若花的黑漆制筷盒中，取出筷子用饭。饭后又收进盒内，放在身边。据白石家的年老女仆说：“过去一次战争中，他斩获了重要敌将的首级，去晋谒主将。主将说：‘打仗累坏了吧？拿这个去吃！’主将把自己的饭菜盘子连同筷子一起赏赐给他。这成为当时荣誉之事，所以直到现在始终不离身边”。^⑥白石的父亲还记得一件事。当他和同年龄的小朋友游戏时，说了一句“你这样说是侮辱人！”被祖父听见，立即告诫说：“男子汉被侮辱是羞耻。刚才的话虽属戏言，听来象是你当真受了侮辱，不应当这样！”白石父亲的身上也充分体现了武士的教养，短刀终

生不离身。喜怒不形于色，笑时也不出高声。他经常教训儿子：“男子汉唯一的是应当练习忍耐。无论碰到什么事，都从自己认为非常难于忍耐的地方先忍耐起。久而久之，就不会有觉得那么难的事了。”他告诫儿子两件事要谨慎：财与色。晚年生病时，正济只把背对人躺着，而且什么也不说。病愈后对人解释说：“我从来没有让人看见我疼苦的样子。如果显得与平时有异，是不合适的。而且，我看到世人往往在发烧时胡言乱语，因此想自己不如不开口。”从白石祖、父两代的轶事，可以推想白石武士家庭的薰陶教养，尽管他不及见其祖父。

对于自己的武士家庭出身，白石本人也是颇为珍惜与自豪的，可举他拒绝与商人家庭联姻一事为证。白石二十岁出头时，父子二人都离开了土屋家，失去主君，成为浪人，生活困难。这时两次有商人家庭提出接纳他作养子和赘婿，都被白石断然拒绝。头一次白石说自己出身于武士之家而不得进用，感到悲哀，对他父亲表示：“我不愿意到我这一辈舍弃父祖相传的‘弓矢之道’，去继承商人之家”。第二次是河村瑞贤（1617-1699）想招他为孙女婿。河村是经营木材致富的巨商，在办理海运和治水方面，都对幕府有很大贡献。他颇有眼光，预言白石必将成为大学者。而白石同样加以谢绝，并婉转表示，日后自己越成为大学者，则与商家结亲的疵点就越会显著。足见白石早年作为武士的自觉性之高。若与江户末期武士之争作商家养子相对照，社会风气与价值观之丕变，就异常清楚了。

据自传所载，白石少年时期曾从师练武，学习刀法，但他所终身从事的，却是文事而非武功。这一矛盾的现象，恐怕要从几方面考察其原因。首先是幕府统治政策的改变。织田信长的儿子信孝的印章上，刻着“一剑平天下”，恰当地反映了战国时代的理想。德川三代将军家光以后，国内政治局势稳定，各项制度与机构趋于完备，不再需要战国以来马上得天下那一套作法。四代将军家纲和五代将军纲吉都倾向于文治为主，纲吉统治时期的元禄时代（1688-1703）更以文化昌盛著称，这是白石青少年时期的社会气氛。白石的母亲是一个文化修养较高的妇女，长于书法，熟悉和歌、物语等古典文学，白石自小受到陶冶。而白石本人确也天资聪慧，三岁时能用纸蒙在书上描绘其图画及汉字；六岁能背诵七言绝句的汉诗；八岁开始习字；九岁时每天临写行草书四千字，还为父亲代笔；十三岁时为藩主土屋抄录信札。所以白石虽出身武士家庭，却放弃“弓矢之道”而成了学者。身居四民之首，为幕府股肱的自觉性，又使白石不甘作讲求性理或训诂的儒生，而要成为“致君于尧舜”的政治家。

作为政治家，存在于白石身上的矛盾，是他对将军家宣献计献策，几乎言听计从，影响颇大，而白石的官位却始终低下，由浪人不过升为旗本。白石从1693年担任甲斐国大名德川纲丰（家宣）的儒者，直到家宣继位将军，于1712年逝世，其间为家宣讲书前后凡十九年，进讲从未间断，共1299次，内容以汉籍为主，如《四书》、《诗经》、《通鉴纲目》等。家宣尊重白石意见，甚至引用佛教“一体分身”之说，意思是他与白石如同一人：“彼如有错误，即我之错误。我如犯错误，亦即成为他的错误。”当时出入将军居城的城门有定制，而白石曾被准许不限昼夜自由出入八座城门。家宣留宿之际，白石被召在侧。然而白石的俸禄只到千石。虽然不断面对将军进讲，而每有政治建白，还须把意见书交给担任侧用人的间部詮房转呈将军。德川幕府坚持封建等级制度，注重门阀，高级幕臣都只能由大名中的上层担任。如大老只能出自堀田、酒井、井伊等几家大名，老

中原由万石以上的谱代大名担任，以后改从二万五千石以上的大名选任。由于大老和老中官位较高，与将军之间的关系趋于正式而严肃，所以将军往往任用所亲信的较小的大名为侧用人，侍候左右，供顾问参谋，并在将军与老中之间起沟通作用，其权势常常大于老中。家宣时的侧用人间部诠房权势很大，白石始终依靠间部向将军建言。西方有的学者诧异白石如此受信任，何以官位不能提升，不知这正是德川幕府封建体制使然。侧用人与我国南北朝时皇帝左右的中书通事舍人颇为相似。白石儒生而必须依附于将军亲信的间部，才能施展政治抱负，在他心理上定有所反应，恐怕也是他遇事偏激，狷介自持的原因之一吧？

江户时期主要的社会矛盾，自然是德川幕府的统治——包括腐朽幕吏等大小当权派与广大农民之间的矛盾。白石固然属于统治阶级，但他从正义与理性出发，往往站在反对幕府权势一边，提出或采取有利于人民群众方面的措施。他的作为有助于将军家宣统治时期的稳定局面，客观上也有益于社会发展。下列事实可以为证。幕府主要掌管财政的勘定奉行荻原重秀（1658—1713）为解救幕府财政困难，于将军纲吉在位时改铸货币，降低金银成色，增加铜的成分，造成社会极大混乱，人民蒙受损失。家宣继位后，废止了改铸的货币。以后荻原不仅贪污受贿，又向家宣献改铸金银货币之策。白石坚决反对，终于弹劾荻原，免其官职，制止了货币的改铸。勘定所这个官署的官吏贪污渎职，农民受害。白石建议在勘定所内添设负责监督的官员，从而减少中饱，压缩河堤工事和漕运等用费，百姓负担大见减轻。又如越后国（新潟县）村上藩领地上八十五个村的百姓四千一百十六人因土地归属幕府或领主村上问题，上诉幕府。勘定所不顾青红皂白，诬以“谋反罪”，裁决依“罪”之轻重，或死刑，或流放，或监禁，并处分其田地住宅等。白石详加调查，认为百姓冤枉，不仅没有要谋反，而且所申诉有理。终于改变裁决，保护了八十五个村的全体百姓。

对于主持司法裁判的评定所这一机构的官员及其裁决，白石也曾建议整顿及修正。如纪伊国（和歌山县）津村地方的货船漂流到远江国（静冈县）篠原海滨。篠原群众乘船破之机，掠夺船上货物。舟长拔刀砍伤一人，并诡称尚有钱财被盗。评定众判决云，村民群集掠夺货物属实，但人数众多，难于加罪。舟长妄称钱财被盗，实无其事，应予斩首。将军询问白石意见，白石认为，据宽永十三年（1636）旧制，不得因犯罪人多即免于处罚。为首者应治罪，参加掠夺者每家出百钱，补偿货船损失。舟长出于忿怒，伪称钱财被盗，可免追究。妄言罪轻，掠夺罪重，罪重者免刑，罪轻者处罚，评定所裁决殊不合理。结果按白石所议执行，评定所的错误裁判得以纠正。

从京都到江户的东海道大路，以前驿舍每年役使人夫二十三万五百五十人，驮马四万一千二百三十四匹。白石改订制度规章，减少人夫十二万二千五百八十九人，驮马四千八百二十三匹，大大减轻沿途百姓负担。白石对于倚仗幕府威权的势力，也从正义出发，予以抨击。奈良兴福寺两派僧人发生主持寺务之争，白石根据文献资料，考订史实，判断一方无理，而这一派僧人正是将军家宣的岳父近卫基熙所支持。

在当时统治阶级内部矛盾的问题上，白石同样从来回避，而是按照自己认为正确